

講演概要

「トランプ外交の本質を読み解く」

米国研究会・年度末公開シンポジウム

(2019年3月11日(月) 16:00～17:30、於日本国際問題研究所大会議室)



<概要>

1. 議題：「トランプ外交の本質を読み解く」
2. 日時：平成31年3月11日(月) 16:00～17:30
3. 会場：日本国際問題研究所 大会議室
4. プログラム

開会辞：中山泰則 日本国際問題研究所所長代行

発表：高畑昭男 白鷗大学教授

『力による平和』をめぐるトランプ外交と共和党 Establishment (保守本流)

宮田智之 帝京大学講師「トランプ派の台頭と米国政治への含意」

対談：久保文明 東京大学教授／日本国際問題研究所上席客員研究員

佐々江賢一郎 日本国際問題研究所理事長／前アメリカ合衆国駐箚特命全権大使

質疑応答

7. 内容

平成29-31年度研究プロジェクト「A 自由で開かれた国際秩序の強靱性—米国、中国、欧州をめぐる情勢とそのインパクト」のサブ・プロジェクトI「トランプ政権の対外政策と日米関係」(米国研究会)の2年目の調査・研究の中間成果を広く共有する目的で、当研究所にて公開シンポジウムを実施した。

本シンポジウムでは、「力による平和」と「アメリカ第一主義」の間を揺れ動くトランプ政権の外交の意味するもの、そして、それが今後のアメリカ外交にどのような示唆をもたらすのかについて、伝統的なアメリカ共和党の外交との差異やトランプ政権をめぐる人脈等から読み解くことを主眼とした。登壇者による発表および登壇者間での意見交換、さらに会場と登壇者との質疑応答が活発に展開され、今後の研究に係る示唆を得た。聴衆約100名が参加した。

以下のような見解が発表、議論された。

- トランプ政権の外交政策は、(1) 外交・安保政策における「力による平和」路線と(2) 通商および移民政策における「アメリカ第一主義」の二本立てと見ることができる。
- その中で、トランプ政権による「力による平和」には、「価値と道義の不在」、「国際秩序への関心の低さ」、「同盟軽視」という特徴がみられ、80年代のレーガン政権に代表される共和党保守本流の「力による平和」との差異が指摘される。しかし、政権発足から時が経過するにつれて、価値と道義を伴う現実主義に軌道修正されていっている。
- しかし、「価値と道義」重視への軌道修正が、米国のリベラル・インターナショナル・オーダーに対する使命の堅持に必ずしもつながっていない点も指摘できる。トランプ政権の外交政策の根幹に「価値と道義」が確固として通底しているとは未だ言えない。
- また、トランプ大統領は対外政策において、予期できないような大きな政策を打ち上げる一方で、その後に戦術的な修正を行い、結果として現実的な路線に落ち着くという面も見せており、トランプ大統領はある種の本能的な調整力を持っているとも言えよう。
- 大統領選の時点ではトランプ候補は共和党の非主流派の域を出ず、トランプ派の政治的インフラストラクチャーは極めて脆弱であった。しかし、大統領就任後、共和党支持者の圧倒的多数がトランプ大統領を支持する中、共和党主流派内で大きな変化が生じ、トランプ派の政治インフラが急速に拡大してきていることが指摘できる。
- 特に、保守系メディアの果たす役割と影響は大きく、トランプ大統領の応援団としての役割だけではなく、保守系メディアの強硬な論調により、トランプ大統領が議会と妥協することがより困難となるなど、保守系メディアの影響が増していっている。保守系シンクタンクにも変化がみられつつある。
- 共和党支持者にポリティカル・コレクトネスに反発する者が多くなっている点で、共和党支持者の内にも変化がみられる点も重要である。トランプ大統領は変化しつつある共和党支持者への対応とその結果としての党内のトランプ支持者の拡大に長けていると言える。
- これらの結果、トランプ派が共和党内で存在感を増大させていることは明らかであり、「アメリカ第一主義」は決して一過性のもので終わらないことが示唆される

• 続く質疑応答でも、活発な議論が行われた。

以上